

この慎み深い格式こそ、紳士たる装いの頂点だ!

英国的たたたずまいは「スリーピーススーツ」に宿る

1666年、イギリス国王チャールズ2世の衣服改革宣言で誕生したのが、ジャケット・ヴェスト・パンツで構成される「スリーピーススーツ」。以来350年、イギリスでは「スリーピース」、イタリアでは「アビト・コンプレート」と呼ばれ、現在まで、紳士服の基本となってきた。今季は、ダンディな男たちを中心に、「スリーピーススーツ」に改めて注目が集まっている。真の男の慎み深いスタイルが、今まさに、頂点を極めるのである。

撮影/熊澤透(人物)、小池紀行(バイルドライバー/静物)、篠原宏明(取材) スタylist/村上忠正、ヘア&メイク/HOKUMI、モデル/BOB、レイアウト/澤田翔(ヒロコ)、撮影協力/ブリティッシュヒルズ 構成文/矢部克己(UFFIN MEDIA)

反ファッションを貫く したたかなダブルスタンダード

文/中野香織

政治・経済という視点から見れば、世界に対する影響力の衰えが目につくイギリスですが、ことメンズウェアにおいては、世界の宗主国としてほぼ不動の地位を保っています。王室の存在ははじめ、様々な理由が考えられますが、その権威を支える最大の根拠のひとつは、メンズスーツのシステムを生んだ国であるという点にあります。

メンズスーツのシステムは、1666年10月7日、当時のイギリス国王チャールズ2世の衣服改革宣言によって誕生しました。今年のスーツ生誕350周年にあたる記念すべき年なのです。そのシステムとは、長袖上着+ヴェスト+下衣+シャツ+タイからなる組み合わせのこと。スーツのシステムが生まれ

たとはいえ、上着の丈は膝までであるし、下衣はハーフパンツ(当時はブリーチズと呼んでいました)だし、ヒール靴を履きロングヘアのかつらをつけているので、今のスーツとはまったく印象が異なります。画期的だったのは、新アイテムとしてヴェストが導入されたことでした。以後350年間、各構成要素の形を刻々と変えながら、このシステムは連綿と守られ続けています。

ヴェストが一時的に姿を消したことはあります。第二次世界大戦中とそれに続く物資欠乏の時代です。布地節約のため、ポケットのフラップまでがNGとされました。ヴェストも省略可能とみなされ、つくられなくなったのです。1960年代に再びヴェストは復活し、ツーピーススーツが主流となった現代においても一定の需要を保ち続け、ここ数年はドレスアップブームに乗って、20代、30代の若い男性の間でも人気を高めています。彼

らにとっては新鮮なスリーピースかもしれません。本来、スーツとはスリーピースで構成される服であり、350年の伝統をもつイギリス発の服であったということは、覚えておきたいものです。

チャールズ2世の衣服改革宣言ですが、「英国紳士を象徴する服」の起源となったという視点であらためて見直してみると、重要なポイントが3つあることがわかります。

まずは、ヴェストという新アイテムを導入したことで、男性の美意識を変える転機をつくったこと。レースやリボンや羽根で飾り立てるほうが「男らしい」とされていた(雄クジャクの発想ですね)騎士道華やかかなりし17世紀において、チャールズ2世は、「貴族に儉約を教える服」としてヴェストを導入します。袖や背中など、見えない部分は安価な生地で代用すべしという堅実な服、それがヴェストというペルシア由来の新アイテムでした。以後、高位の男性が着る服は(あくまで前時、

英国人の矜持が漲る 正統かつ粋なスリーピーススタイル

左ページ・写真右から●俳優、デヴィッド・ニーヴン。1930年代、映画出演のためカリフォルニアに滞在していたデヴィッド・ニーヴンは、ハリウッドの世界でもひととき目立つスリーピーススーツを着こなしていた。大きなピークドラベルのジャケットは実にエレガントだ。●写真家、セシル・ビートン。華麗なファッション写真とポートレートで、雑誌「ヴォーグ」などで活躍した。書斎で写した、完璧なスリーピーススーツ姿の1950年代のポートレート。●ウィンザー公。エレガントなスタイルから、洒落な着こなしまでを世界に披露した、メンズファッション史に残る粋人。20代の頃、集中的に着用したのが、シルエットの美しいスリーピースだ。

代比ではありませんが)「簡素化」していき
ます。紳士の服が、堅実・抑制・反裝飾
という方向へ向かう契機をつくったとも
いえます。英国紳士のスーツが湛える特
権的な贅沢感が、富の誇示とはむしろ逆
の、控えめで質実剛健な気配に潜むのは、
こんな起源と無縁ではありません。

ポイント2は、この衣服改革宣言が、
アンチ・ファッション宣言であったこと。
「余は新しい衣服を採用することにした。
以後、これを変えることはない」と国王
は宣言します。トレンドがどう変わろう
と、このシステムは変えない。未来永劫
にわたりアンチ・ファッションのスリー
ピーススーツを貫く。これを国王が表明
したという史実の重みは大きいでしょう。
イギリスのジェントルメンズ・ウェアの
魅力の源泉が、多少の流行からは超然と
していられるという点にあることは、言
うまでもありません。

ポイントその3は、堅実さの表明とし
て採用されたはずのヴェストが、実はも
つとも裝飾的なパーツとなる可能性を秘
めていた、ダブルスタンダードな服であ
ること。見えない背中が安価な薄地でつ
くったとしても、正面はボタンと刺繍で
飾り立てるといってツワモノが出てきたし、
その名残りとして、現代の結婚式では刺
繍入りの派手なオッドヴェストを見かけ
ます。紳士養成校パブリックスクールの
一部の上級生が、特権の証として目立つ
柄のヴェストを着用したりもしています
ね。この場合のヴェストはむしろ、贅沢
な裝飾品に近いです。ともすれば退屈に
なりがちなメンズスーツを長く着続ける
ために、ときにエキセントリックな楽し
み方を自らに許すパーツとしてヴェスト
を位置づけてしまった、と見ることもで

きます。知恵なのか皮肉なのか遊びなの
かよくわからない、重い歴史をもつ服と
の軽やかなつきあい方もまた、したたか
なイギリス紳士らしさとして映ります。

もちろん、ヴェストことウエストコート
(イギリスのテラーはしばしばウエスカ
と発音します)は、実用的でありながら装
飾を楽しめるパーツとして貴重です。実
用という観点から見れば、下着であるシ
ヤツや留め具であるベルトやブレイシー
ズを隠す役割を果たし、ウォームビズに
貢献し、体型キープにも役立つという、
マルチな機能を果たします。裝飾という観
点から見れば、ネクタイを立体的にキ
ップできるし、お好みで懐中時計用のアル
バートチェーン(フオブチェーン)を飾る
ことができるうえ、ジャケットとの重ね
方次第で奥行きを演出することができます。
スリーピーススーツの魅力を語るにあ
たり、表向きの歴史とメリットを滔々^{たうたう}と
述べていくのもよいのですが、せっかくだ
ダブルスタンダードな紳士服の話をいた
しましたので、最後にちょっとだけ、裏
側のお話を。アイテム数の多いスリーピ
ーススーツは、実は、ツーピースのスー
ツ以上に、セクシーな服です。上着を脱
いだときの、リラックスしながらもくつ
ろぎきつていないヴェスト姿は、女性に
ひそかなときめきを与えてくれます。

紳士のみならずには、そんな女性の胸
中などあざかり知らぬという風情で、3
50年の歴史に敬意を払うフリをしつつ、
端正に超然とスリーピーススーツを着こ
なしていただきたく存じます。

プロフィール／なかの あり。明治大学国際日本学部
特任教授。ファッション文化史やダンス・イシュー史などを
専門とする服飾史家。「スーツの神話」(文春新書)、
「ダンス・イシューの系譜」(新潮選書)など著書多数。近
著「紳士の名品50」(小学館)も絶賛発売中。

Cecil Beaton

セシル・ビートン(1904~1980)

©Popperfoto/gettyimages



Duke of Windsor

ウィンザー公(1894~1972)

©Popperfoto/gettyimages



David Niven

デヴィッド・ニーヴン(1910~1983)

©REX/PPS通信社